



忘れぬために 乃が一ふれたときに見るために
忘れてはいけないことを書き記す—備忘録—

2000年総選挙 備 忘 録

寺 山 と し お

あれは5月の半ば、石原知事と懇談している席で、知事はこう言い切った。「自民党も民主党もダメだな。今度の総選挙で伸びるのは、共産党だよ。」

時代も有権者も、既存の政治や政党に飽き飽きしている。その不満が、共産党へ風となって吹きぬけるという読みだったようだ。選挙結果は、石原知事の読みどおりには、いかなかったが、有権者の心理を捉えた予想であったことは間違いないだろうと思う。何をなすべきかが分からず立ち止まっているのではない。どう変わらなければいけない



今回の総選挙で、森首相の「神の国発言」「投票に行かないで寝てくれればいい」など、度重なる失言を捉え、マスコミは森首相の資質を問うた。そして、野党の大多数の候補者が、この問題を選挙の争点に掲げて戦った。森首相が、日本のトップリーダーとして、ベストでもベターでもない人物であることを、有権者の多くは感じ取っていたことは間違いない。私も、事実そうだと思う。しかし、真の選挙の争点は、それだったのだろうか。

二年前の参議院選、昨年の都知事選挙を経験して、特に感じるようになっ

のか、分かっていない訳でもない。

しかし、政党も政治家もそれを変える事ができない。このような状況に対して、有権者は不満を持ち、半ば諦めに似た感覚で、政党・政治家をじっと見続けている状況に陥って、一体どれだけの時が過ぎただろうか。今回の総選挙では、有権者の多くが少なからず一縷の望みを持って、政党や候補者が自分たちに一体何を訴えかけているのかを、待っていた筈だ。だが、そうした有権者の政治に対する僅かな望みに応えることのできた選挙戦だっただろうか。

たことは、街頭演説や宣伝カーでの選挙活動において、有権者からの反応が読み取りにくくなってきていると言うことだ。今回の総選挙でも、それは同様だった。東京において、野党である民主党は勝利を収めたが、こんなにも民主党へ風が吹くとは、思っていなかった。恐らく、多くの議席を失った自民党ですら、このような大敗を期すとは想像だにできなかっただろう。選挙結果については、様々な角度から分析が行われていたが、私は、結局のところ「この選挙で一体何が問われていたのか」と言うことの答えを見出すほかないだろうと考える。

この選挙期間中、私は宣伝カーに乗
り、世田谷区内を走り回った。その中で、
脳裏に焼きついた2つの光景がある。

ひとつは、ひとり歩きのお年寄りの姿
だ。雨の中、時には梅雨の晴れ間の30度
を越す炎天下の中、住宅街の道を、ゆっ
くりゆっくりと歩いているお年寄りに何
度も出会った。どこへ何をしに行くのか
は分からない。しかし、その曲がった腰、
あるいは引きずるよう運ばれる足取り
は、私に様々な想像を課した。ひとり暮
しか老夫婦二人きりでの生活を送って
いる方々も少なくはないのだろう。買い物
に行くのか、友達に会いに行くのか、い
ずれの目的にせよそのために、近くのパ
ス停や駅までの長い道のりをひとりで歩
かなければならないのだ。

そして、もうひとつは、ママチャリに
乗った若い母親たちの姿だ。前の籠には
スーパーの買い物袋、後ろにはまだ小さ
な子供を乗せて走る。時には自転車のハ
ンドルに取り付けた補助席に、背中に、
そして後ろにと、3人の子供を自転車に
乗せて走る姿も珍しくはなかった。



ひとり歩くお年寄りの横を、宣伝カー
が通り過ぎる。必至にペダルをこぐ母親
の上下する背中を見ながら、宣伝カーは
滑るように前へ進み、追い越して行く。
果たして、明らかに選挙カーと分かる、
声高にしゃべるこの車との出会いの一
瞬、その人々からは何の反応も示されな
い。宣伝カーなんてうるさいばかりで迷
惑だ、あるいはもう自分は他の候補者を
応援しているので、反応しなかった、と
いうことも考えられる。

しかし、その宣伝カーに乗っていた私
は、同じ道を通ったにもかかわらず、す
ぐ側を歩き違ったにもかかわらず、まる
で違う世界にいるかのような、そんな厚
い壁、あるいは深い溝のようなものが横
たわっているような感覚にとらわれた。



今回の選挙で問われていたものは、政
治は自分たちの生活や将来の人生に、一
体どのような関わりや役割を果たしてく
れるだろうか、という当たり前の問いを
抱くひとりひとりの有権者の心に、どこ
まで答え訴えることができるかであっ
た。それは大言壮語の飛び交うような、
そんな雲の上の政策議論ではなく、今現
実に一人一人が実生活の中で直面してい

る、苦難や苦勞そして漠として見出せない将来に対するものについてだ。

私は、この選挙期間中、森首相や自民党のことを、皮肉ることはしたが、まともな批判に時間を割くことはしなかった。それよりも、小学生の6割から7割が何らかのアレルギー性疾患を抱えている、都内に一万人を超える不登校の子供たちが存在しているなどの現実を、どのように受け止め、救うべき道を切り開い



既存の政党・政治家に、有権者がNOと言っているにもかかわらず、そのことを政党・政治家は認知していない。この有権者のNOという意思表示の裏には、そうした私たちの身近な問題に対して、何ら力にならない政治の存在がある。

選挙というものが、民主主義を育て、私たちの現状や未来の生活に対する選択の場であるならば、今回の選挙も結局はひとつの政治ゲームに終わってしまったのではないかという気がする。自民党も民主党も共産党も、結局は敗けたのだ。

また一步、政治と有権者の距離が遠くなった。私自身も、そして政治に携わるひとりひとりが、猛省しなければならぬ。当落にのみ勝敗の意義をおき、勝ち

て行けばいいのか、不完全な介護保険制度の中で、不自由や不安を抱えているお年寄りを一体どのように支えていけばいいのかを、具体的な事例を元に訴えた。

ある駅頭の演説で、私の前に訴えた参議院議員の演説に、道行く人は足を止めることなく通り過ぎた。そして、私の演説が始まった。ぼつぼつと足を止めて聞いてくれる人がいた。それは、私の演説が上手いとか下手だとかいうことではなかったと思う。恐らく、私の話の一片にでも、心のどこかに引っかかるものがあったからであろう。別に偉そうな、大層なことを言う訳ではない。私の演説は、様々な方々と出会い、様々な問題と直面してきた、これまでの政治活動の中から紡ぎ出されるものだからだ。

に浮かれる人、敗北に涙する人もいるだろう。しかし、もう一度私たちは原点に立ち戻り、選挙が、ひとりひとりの有権者の生活や将来を預かる最も大きな責任を背負う場所であることを、見つめ直さなければならない。変えなければならないことは山積している。

私は、諦めずに立ち向かって行きたい。

